

である。引っ越してまもなく、この古刹を訪れた。

平治の乱で敗れた源義朝は、わずか十

人ばかりの郎党を連れて、平治元年（一一五九）十二月二十八日、この近くの長田忠致おさだただむねを頼つて身を寄せた。ところが、年が明けた正月三日、忠致に裏切られ、入浴中に殺された。

「我に木太刀の一本なりともあれば——」

と義朝は叫んだという。

義朝の墓には、今でも真新しい木刀が山のように供えられている。近くには、義朝の首を洗つたという血の池まである。

のちに頼朝は父義朝の菩提を弔うため七堂伽藍を建設した。建長二年（一一五〇）の銘がある梵鐘は国的重要文化財である。寺は、豊臣秀吉や徳川家康の庇護も受けた。

「……愚答ぐとうを記しおくものである。しかし、生来愚かで、悪筆の我であるから、文字を誤り、術の誤りもあると思う。以後算道に明らかな人がご覧くだされても容赦じやくしゃくだされ、悪いところは補いお直しくだされたい」

本尊の阿弥陀如来像が鎮座する本堂は、比較的新しく、宝曆四年（一七五四）の建立である。訪れた時、階段を上がつて右側、鴨居のあたりに、算額さんがくのレプリカを見つけた。江戸時代に流行した算額は、

難しい数学の問題が解けたことを神仏に感謝するために奉納した、絵馬の一種である。

こここの算額は、明和八年（一七七一）十一月に、榎本章清が奉納した。隣接する南知多町の光明寺や泉藏院にも、章清の奉納した算額が残っている。

野間大坊の通称で知られる真言宗の大御堂寺（愛知県知多郡美浜町）には、源頼朝の父義朝の墓がある。

そこは、勤務地からは少し遠いが、終の棲家としてマイホームを建てた住居地

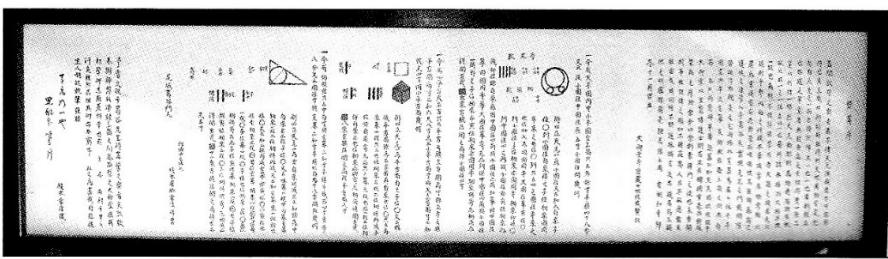
〈エッセー 地方の知られざる歴史〉
史跡と算額のある終の棲家

鳴海 風

の数学和算に興味を持ち始めた私が、身近に算額のある場所に引っ越ししたのは偶然だが、運命でもあつたのかもしれない。

翌年の十二月、勤務先が明日から年末年始休暇で、大掃除をしている時、自宅

く同地に住んでいるから、ここが終の棲家になりそうだ。



大御堂寺の算額（レプリカ）

から電話がかかつってきた。私が応募した関流数学者建部賢弘を主人公にした小説『円周率を計算した男』が、

第十六回歴史文学賞を受賞したという妻からの連絡だった。プロを目指すと決意して十三年目だった。

それから三十年、義朝のように入浴中はもちらん、寝首を搔かれることもな